



# 「人に向き合うこと 世界に向き合うこと」

認定 NPO 法人アークス仏教国際協力ネットワーク

理事長 茂田 真澄 師

こんな寒い中、わざわざお出かけいただきましてまことにありがとうございます。私はアークス仏教国際協力ネットワークの理事長をしております。1979年〜80年あたりに青年僧の集いの中で、インドシナ難民の人たちと接することがあって、そこから現在につながっている、それが私の衆生救済の活動のスタートです。

衆生救済って仏教の人たちはよく言うんですけど、じゃあ実際に人々のために何をするのかっていうことはずっと私の学生時代からの頭の片隅にありました。その中で実際には何もできない自分というのが若いときの実感だったんですね。自分ができること、まずはお坊さんとして街頭募金とか、そんなところからスタートしましたが、そこでは実際にカンボジアの人たちと出会うことはありません。その後、タイとカンボジアの国境にあります難民キャンプに伺う機会を得ました。そこで初めて難民という人達と会ったわけですね。5万人以上の人たちに難民キ

ャンプで会って驚いたことと、政治的な問題も含めていろんなことがわかっていく中で、その人たちに自分が何もできないっていう実感をした。その中で何ができるかなっていったときに、難民キャンプに海外からきている人たちの活動を見て、私の中でこれだって、いう、なにか大きなものをいただいで、そこから青年会の中で活動がスタートしました。

難民キャンプには海外から大勢の方が来ていますが、その中ですごいなと思ったのが言葉の問題。言葉の問題って大きいですよ。私は日本語しかできませんから、海外に行ってもコミュニケーションがとれない。数年後にカンボジアに行ったときには、以前の難民キャンプで出会ったNGOの人たちは、英語だけじゃなく現地の言葉も勉強してコミュニケーションとって活動している。そうしていかないと人と繋がれない。現地の問題は現地の人が決しなければならいんだけど、そのことに協力していくには言葉が重要

なんですね。第三世界から何か動いていくっていう状況は簡単にはいかないんで、どうしても海外からの人たちのこうした協力が必要なんです。それによって世界の人が注目するっていうようなことも大きいんだと思うんですね。

私の寺では募金を30年以上前からやっているんですけど、東京に浄土宗の寺院が400ヶ寺くらいあるんですが、その青年会で私が担当していた時に感じたことは、募金についても状況を知っているか知らないかで本気になるかならないかっていう問題があると思うんです。継続は力なりと言いますが、だんだんと継続が弱まってしまふ。そんな中で1993年に超宗派で本気の思いがあるお坊さんたちを集めて「アユス仏教国際協力ネットワーク」という会を作ったんです。衆生救済を具体的につて言ったとき、お寺として世界の問題を知ってもらって、そこに喜捨された募金とか寄付とかを、NGOの人たち、すでに良いプロジェクトをやっている人たちがいますから、

そういうところに協力していく。このような形が、私が考える衆生救済に繋ぐ具体的な活動だったんです。もう二十数年やっています。

ところがなかなか簡単じゃないんですよ。私自身、社会で働いたことがない。ましてやリーダーになって人を引っ張っていくのも初めての経験の中で、しっくりいかないことがたくさん起っちゃうんですね。有能なスタッフがいて、会議を重ねてやっていくんですけど、人と気持ちが一緒になつたかと思えば離れてしまうみたいな繰り返しでした。私は凶太く見られるんだけどけっこう神経質で繊細な小ぢやい自分と葛藤しながらやっていて、事業は始めているんでやめることはできない、でもだんだん苦しくなっていく。当時、子どもがまだ小さくて夜泣きとかする年齢だったんですけど、そういう中で、どうしていったら良いかわからない。眠れないとか、食べられないとか、ときには死にたくなっちゃうとかあったんですね。そんな中で病院

に行きました。精神安定剤と睡眠薬をいただいて、症状は簡単に落ち着くんですけど、問題は解決できていないわけですよ。それに取り組む中で、NGOの仲間からいろんな話を聞いて問題を解決していくことが、自分の中ではすごく大きな経験となりました。

NGOの人たちが海外でいろんな人たちと接しているんな問題がおこる。それに対して実際に行動を取らないと問題って解決つかないんですね。自分のNGOの事業所でも、問題をどうにか片づけるように実行する、苦しんで時間もかかりますが、実行して解決すると気持ちもすっきりする。数年たつとまた違う問題が出てきたりしますけれど、その時にも死にたくなつた自分と出会ったことがある意味大きく影響しています。

うちの寺では30年以上前「なんでも無料相談」という看板をあげていたんです。先代の住職の時からやっていた活動なんです。話を聞いてあげることが第一歩で、それに対して行動をとる

ことがその人の問題解決につながるの  
であればお寺の事業として大切なこと  
だと思っすね。ところが、お金を  
貸してくれとかいろんな相談がきます。

浄土宗から配られたと思うんですけ  
れど「心といのちの相談所」というの  
が送られてきました。ああ、これだっ  
て思いましたね。だから看板を付け替  
えました。

看板を見てわんさか人がくるわけじ  
やないんですが、あるとき暑い最中に  
20代の女性が訪ねてきました。話を聞  
くと、最初は何を言っているかわから  
ない。悪魔が出てくるみたいなカルト  
的な話かと思うと、自分の生い立ちの  
不幸の話が延々と続くんですね。1時  
間、2時間、4時間くらい聞いてい  
たらこちらもその子もだいぶ疲れてき  
て、その日はそのまま帰りました。

それから2、3週間して、まだ暑い  
最中にまた訪ねてきたんですね。また  
話を聞くんですけど前回と同じよう  
な話の内容で意味不明なことも多いん  
です。そんなことが数回あって、いつ

も連絡なしで来るんだけど、私がたま  
たまお寺にいるときに来るので、何か  
縁があるなって思っただんですが、これ  
からお葬式に出かけなきゃならないと  
かいりいろあるわけです。でもこの子  
を放ってお葬式に行かれないなってい  
うこともあるんですね。生きている人  
を優先すべきだなんていうような思い  
なんです。そんな時は先代の住職な  
どに頼むんですが…。

そうしているうちに、こちらの話も  
聞いてもらえるようになってきて、暑  
い最中なのに、その子は長袖を来てい  
るんですね。暑くないのって訊いたら、  
実は自分で自分の手を焼いてケロイド  
になっちゃっているんで長袖を来てい  
る。これが治せたらちゃん働けるよ  
うになれるって話してくれたんです。

じゃあ治せばいいんだと思って知  
り合いの医者に訊いてみたら、整形外  
科と精神科がある病院にまず行ったら  
どうだろうといわれ、紹介状を書いて  
もらって一緒に病院へ行きました。そ  
のうち一人で通院できるようになって、

ケロイドもだいぶきれいになって肌を  
露出しても平気な状態にまでなったん  
ですね。仕事にもついて、それで安心  
していました。

そういう子が寺に来ていることは、  
近所の消防団の人たちも知っていたん  
ですね。5年ほどたったあるとき、そ  
の子が電車で飛び込んだと連絡があ  
りました。便りが無いのは無事の知らせ  
と欲していたんですが、亡くなっちゃ  
ったんですね。大失敗だなんて思いま  
した。

その子が亡くなったことに供養と  
かお経をあげるとかは坊主としてでき  
ますが、実際に亡くなっちゃったとい  
う現実を取り返しがつかないという  
思いが自分の中で大きかったんです。  
こういう相談を受けていく中で、辛い  
経験をしてアフターケアが大切と感じ  
ました。

地元には社会福祉法人『コメント』と  
いう団体があります。そこには10代か  
ら60代後半くらいまでの統合失調症  
や精神疾患の方々がいらっしやるんで

すが、そのスタッフの人たちと繋がりを持てるようになりました。そうしてだんだんと信頼関係が持てるようになって、私の携帯電話には、40名くらいの相談者が登録されています。24時間、その相談者からの電話を受け付けます。時には会うこともしますし、薬をまとめて飲んじやったと連絡があつて、ときには救急車を呼ばなきゃならないこともある。家で暴れて強制入院させるようなことも、全部私が行動するんです。

窓口はお寺でもできるんですが、連携するお医者様、これがやはり重要です。お医者様とどういふふうに繋げられるかなんです。

相談者は、10代〜30代の女性が多くて、どういふわけか男性は少なく、20代1くらいですね。また、長く相談を受けていますが、自分より年上の相談者は、去年初めてお一人ありました。私のお寺の話聞いてとか、看板を見て飛び込んでくるという縁だと思ふんですけれど、生きている人優先ででき

る活動としてはお寺がやるべき活動だなんて思えるんです。そのために何か勉強しなきゃってことではなく、誠実にその人と接して、その人のために行動をとるかかってことなんです。

人は、相性ってありますよね。精神疾患の方を病院に繋がたら、お医者様と合わないっていうことがあるんです。そうするとその人だけで行っても問題をクリアできないので、一緒に行つてその人の胸の内を理解して、お医者様を替えるとか、病院を変えるとか、時間ばかりですがそうやってあげることで活動しているNGOの人たちのように、その地域の中でやれるまさに衆生救済につながる活動だと思ふんです。

相談者は苦しくなったりすると、時間やアポイント関係なしに連絡してきます。その場で電話に出られないときでも、数分〜1時間以内には折り返します。それでどうしたのって訊いて、すぐ行動に出る。でもすぐにいけないことも当然あるので、仲間や専門家の

人に言ってもらおう。今、お寺には職員が数名いますので、少しずつできるよになつたらいいなと思います。

いろんなことがわかってきて、お寺の中の一番大きな仕事、お檀家になる人も、地域の人たちも、安心に繋がる何か心の支えのようなもの、お寺としてできる大きなものだなっていうのが20年ちよつとやってきた中で実感しているんです。

あるとき、多重人格の人が相談に来ました。それは初めての経験なんです。病気になるには原因があるわけですね。その原因がわかるんですね。当事者は30代の女性なんですけれど、そのお父さん、お母さんの3人の家族の中での問題なんです。

最初に会った時には、嘘ついてるのかなと思えちゃうんですね。しゃべっているとき突然4歳の子どもの声が出てくる。そうかと思えば、その4歳の子にとつてのお兄さんっていう年齢は不詳な人が出てくる。あとお姉さんも出てくる。見た目は同じなんですけれど、

声が違う。当人以外の3人の人格が出ていました。付き添いで来ているお母さんの話では、その4歳の子は「ひーちゃん」というそうで、その子との会話の中ではなかなか原因は訊きづらい。そこで娘さんが寝ている時にお母さんだけにきてもらったりして、原因はお父さんということがわかりました。

原因は分かっていたけれど、どんなお医者様に繋ぐのがいいのかわかって。実は精神科のお医者様に相談しても、自分には荷が重いとやられてしまう病なんですね。やっとなある先生に辿り着いたんですけれど、催眠療法などで治す方法はありますが、実際には問題が解決つかない限りは治せない。自傷行為に走ってしまったって亡くなる恐れもある。この娘さんは、お母さんと他の人格が死なないように守っているということなんです。

そんな中で、連絡が来たら最優先で会って話を聞く。違う人格との会話は難しいんです。そして過去に取り返しのつかないことをやっちゃって原因と

なっているお父さんとも会う。離婚ということになって、生活していかなくやならないからお金の問題も出てくる。これはちょっと厄介だから弁護士さんを入れる。社会福祉法人の副会長さんが弁護士で、話しをしたら無料で手伝ってくれて。お父さんにも何とか納得してもらって契約書を作るんですが、その中には500m以内に近づいちゃいけないとかいろんな条件が入っているんです。だから、例えばどこかに行くときには電車で近くの駅を通過するんですが、それさえも事前に知らせてもらって、直接連絡を取り合えないから、間に入って調整したり。とにかく時間も手間もかかるんです。でも、一時は4人目、5人目の人格が出て狂気の人格も出るように病気が進んでいたんですが、今は落ち着いてきて元の3人になっています。病気は治せないけれど、どうにかお互いが生きていられる状況にできた、そのためにお坊さんが時間を使う。そうやっていることが

自分自身が坊主になってよかったなど、つくづく思うんです。

「心といのちの相談所」には、常時40人くらいの方が相談をしています。そんな中で、今の課題として高齢化社会の中での問題。障害のある子どもさんをもっている方は、どう考えても自分の方が先に亡くなっちゃう、その時にどうするか、成年後見を含めて相談を受けます。どういうところと繋げていけばいいか相談している中で、いろんな人に縁ができて繋がる。お寺に来てくれることによつて、こっちに繋がるといふようなことが、成年後見も含めてできる。それも何かお寺の役割として大きくなって感じています。

「心といのちの相談所」で相談を受けている中で、20年前から来ている男の子がいます。この子はちょっと心の問題、頭の方の病気があって、親ともうまくいっていない、ちゃんとした仕事もできない。八王子の教会と町田のお寺にも行っているという中で、農家の手伝いに行くようになって、土い

じりが好きなので生き生きしてきたんですね。でも今度は花を作りたいと考えた。でも誰も種も肥やしも買ってくれなくて教会とも金銭的なトラブルが起こった。せっかくその子が自分からこれをやりたいということが出た時に、縁があったんだから少しでもその子の人生が楽しくなってくればと協力したんです。この子は何かあると電話してくるんです。誰かに馬鹿にされたとか、誰々を殺したいとか。そんな時はそんなことをしないで、こういう風に逃げるんだよと対処の仕方を教えたり。

高齢の両親や、協力してくれない弟さんの中で、自分はボランティア的な仕事しかできなくてどうやって生きていけるんだってという心配をずっと抱えているんですね。実際にお寺に何ができるかっていうと難しいでしょうけれど、少しでもお坊さんが心の支えになれるような話をしてあげる。うちの職員もこの子と会話をしています。

地域の中でお寺の大切な役割ってあると思うんです。そういうのを考え

出したらいくらでもあるけれど、考えているだけだったら全然意味が無く、大事なのは実行する事なんです。実行すると次に進むっていう、私はずつとその繰り返しなんです。実行していくうちにいろんな人と出会えて繋がる。あることに長けている人がいたらそこに繋がるっていうように、何か人と繋がったことによつて私自身の財産というようなものを持てるようになりました。

私どものお寺は勝樂寺って言うんですけれども、他のお寺からも勝樂寺さんに生きなさいって回されちゃうんですね。忙しくなっちゃうんだけど、自分の成長に繋がるので、メリットの方が大きい。檀家も増えているんです。そういうことやっているお寺だから檀家になりたいって。その中には相談を持ってくる人もいますので忙しくなつて大変だけど、お檀家が増えることもメリットと考えられるし、忙しくなかつたら生きててもつまらないなつて私は思うんです。この活動をずっとやっ

ていければなつて思っているけれど、どういふ風に後継者を作るのかなつていうようなことが私の課題でもありません。

実は、震災の時に「TENOHAS I」というホームレスを支援している団体の代表の森川すいめいさんという精神科のお医者様に会いました。その人に、坊さんたちを集めた講演会に来てもらったんです。その時に、心の問題だったらお坊さんの仕事だろうって言われて、そこにいるお坊さんたちはちよつと頭を上げられなかつたですね。心の病つて言っても頭の病、これは早くにお医者様に繋げないと。私はお医者さんとなげたいんですよ。

相談者の中で、すごく正義感が強いご婦人がいます。最近は何んでもパソコンで調べられますよね。薬についてどうやってできているのか、刑務所に入っている人たちに人体実験して作られたとか。そういう薬は使いたくないとか言つて、薬を処方されても飲まないんですよ。その人に合った病

院、お医者様を探すんだけどなかなか合わない。家族も一緒に相談に乗ってるんですけども、まだまだ解決がつかない。

いろんな相談を受ける中にはつらい経験もあります。

ある男の子で、この子は統合失調症で入院施設に入院させていました。家族に理解させて、母親は子供のことを理解して対応がちゃんとしていた。親父さんは元大工さんで、脳梗塞をやって半身不随になっちゃって家にいるようになってになっていた。その子も大きな工場で働いていたんだけど、病気になってからずっと家にいるだけ。浮き沈みが激しくて、幻聴が聞こえる、幻影が見えるとか繰り返し、あるとき警察を呼んで強制入院させるといふこともしました。そんな中で、安定してきたからお正月休みに一時帰宅させましたよって連絡が来たんですね。ああよかったなと思って帰ってきました。

精神科に入院している人なんかでも、タバコとか吸うんですよ。先生、

病院側もやめろとは言わない。少しでも気持ち安定しているんだったらつていうのが多いんですね。ところが、その子が帰ってきたら、いきなり父親に「まだお前はタバコ吸っているのか！」って言われて、4階から飛び降りました。

連絡が来て、これは大変だぞって、すっ飛んで行って、移動しながら救急車も警察も手配し、救命センターのある大きな病院に運びました。父親も母親も対応できず、すべて私が対応し、家族全員に会せるようになって、なかなか連絡が取れないお姉さんも何とか間に合った。弟の名前を呼ぶんですね、最期。その子の名前を呼んだら、意識のない中で聞こえたかどうか分からないけれど、赤い涙が出て亡くなりました。私もその場にいたんですけれども、こういうことにも坊主だからっていうのではなく、関わったら最後まで関わるんだなことで。こんなことは望んで経験できることではない

けれど、こういうことをして次に行動に繋がっていくと私は思うんです。これからも何かがあるかわからないけれど、生きている方優先、どういう状況にも対応する、これが私の考えです。まあ浄土宗だから南無阿弥陀仏が一番中心ですけど。

自分が今まで経験していたことを話して聴いてもらってもシェアにはならないんですね。聞いて動き出してくれたらシェアなんです。中東のどこかに行つて、何か活動できるつていうような NGO の人もいます。もうすごいなつて私は思うんですね。だから協力したいんですよ。だつて自分でできませんもん。言葉もだめだし、飛行機にも一人で乗れないようなタイプですから。だからできる人には協力する。そういうことの繰り返しで、若い人とも付き合ったり、お寺を場所として提供していろんな集会をやったり、協力するつてことを、20 数年やってきました。失敗もたくさんしながらやっていく中で、

自分も成長して、お寺も実は大きくなっていった。それを今、実感しています。

どこまで大きくなるかわかりませんが、それでも、すべてやりだしたら責任がつくわけですよ。人生で責任を取ろうと思って、1993年に「アユス仏教国際協力ネットワーク」を作ったんです。

実際に衆生救済っていうのを具体的にどうするかっていう中で、自分が考えた中では、専門家の人とかいろいろ先生たち、自分のところのスタッフ、私より頭の良い高学歴のスタッフがいますから、そういう人と繋がっていく中で事業をしていく。その活動の財源は、お寺からの寄付とか、会費とか、募金とか、そうやってできているんです。

実際に仕事するには坊さんだって霞食べて生きていけませんからね、給料もらって生きられるわけじゃないですか。でも、給料もらえない子がいるわけです。世界には。まあ国内にも。

その問題をどうするかっていうことですよ。やろうと思ったらいくらでもあるんですけど、手も頭も同じ数しかありませんから、限りがあります。それでもそういう思いで実行する、考えるのも大切ですけど、実行していく、そんな中で、今日はお話をさせていただいてありがとうございました。どうも失礼いたしました。

平成二十八年三月二十四日

「いのちを見つめる集い」より

【講師プロフィール】

茂田 真澄 師

浄土宗 勝楽寺住職

認定NPO法人アユス仏教国際協力  
ネットワーク理事長  
仏教NGOネットワーク理事